

# 京橋の印刷

8月10日 1996・No.95

東京都印刷工業組合京橋支部  
〒104 東京都中央区新富1-16-8  
日本印刷会館3F 電話 3552-1855  
FAX 3297-3790

発行人  
十文字 康雄



## 邂逅と謝念

支部長 十文字 康雄

京橋支部運営の一端に携わるようになりましてから四年を過ぎました。その間、業界の多くの先達の知己を得、また多くの人々の友情に接する機会に恵まれてきました。青春時以降、久し振りに己を覚醒させる時を迎えたと言ったら大袈裟でしょうか。自分を目覚めさせてくれる機縁、人々との本当の出会い、即ちこれを邂逅と言いたいと思います。宗教や書物でもいいのでしょうか、私はやはり生きた人との邂逅こそ人生の重大事だと思っております。そして邂逅によって結ばれた尊敬や友情に、生きる証を見たいと思います。「人はみな師、人はみな友」でありますし、今この人に会わなかったならば自分はどうなっているであろうかと思えば、そこに生ずるのは感謝の念です。時代は目まぐるしく変化し、仲々の平安を感じられない日々を生きているだけに、尚のこと邂逅の喜びは尊く、それを得た時の謝念を大切にしていきたいと思えます。懐しく、そして直ぐ会いたくなる人を沢山持ちたいものです。

さて、私達中小印刷界が置かれている経営環境は相変わらず厳しく、また多様なメディアの中で、その位置付けがどうなるのか未だはつきりしておりません。印刷業界はついこの間まで鋼鉄のバリアーに囲われた聖域の中で、印刷にはまるで素人の顧客を相手に成長を続けてくることができましたが、今日ではどうでしょうか。「紙に情報を乗せる」印刷業」という図式があやしくなり、紙以外のデジタルメディア・媒体へも出力できる企業に質的变化していかなければならなくなって参りました。このような観点から、東印工組は安値受注の排除、取引の適正化の推進と共に、技術革新に対応した電子化教育を引続き積極的に推進することを提唱しております。一方、支部事業といたしましては執行部発足後早速7月1日に、プリプレスのフルデジタル化の強い流れの中で、中小印刷業の経営戦略はどうあるべきかを命題に技術研修会を開催し、多大な反響を得ることができました。八月下旬には改正消費税研修会を行うべく準備を進めております。

由緒正しい支部の矜持を保ちつつ、執行部役員の手添えを得ながら、一期二年支部運営に微力を盡したいと念じております。支部組合員の皆様の一層のご支援をお願い申し上げます。

# 平成8年度通常総会開催

於・銀座東急ホテル

5月16日(木)18時より、銀座東急ホテルに於いて、恒例の京橋支部平成8年通常総会が開催されました。山崎副支部長の司会で、石井副支部長が開会のことばを述べて始まり、荒川支部長が執行部を代表して、次のような挨拶を行いました。

「心技体をもって支部運営を計る、」厳しい時こそ組合に結集すべきである、ことをテーマに支部役員共ども支部運営に当って参りました。支部研修会も数回行い、多くの組合員の皆様にご理解とご協力と多大なご支援を頂きながら任期を全う出来ましたことに、心から感謝申し上げます。と挨拶があり盛大な拍手を受けました。

続いて議長、副議長の選出に移り、執行部一任の声により、京橋地区長(株)モリイチ山口順治、築地地区長(有)すのはら印刷所春原英夫の両氏が議長、副議長に拍手で選出されました。山口議長の議事進行で、第一号議案・平成七年度事業報告が荒川支部長より説明されました。

続いて第二号議案、平成七年度収支決算報告が関根副支部長により説明があった後、同監査報告が木島・宇津木監査よりなされ、両議案の採決が諮られて、拍手の内に承認されました。



次に第三号議案・平成八年度事業計画案が十文字副支部長より、第四号議案・平成八年度収支予算案が関根副支部長より、それぞれ行われて、質疑応答が諮られましたが、いづれも拍手

により承認されました。

最後に第五号議案・次期役員承認の件では推薦委員会石澤委員長より新執行部役員名が読みあげられ、山口議長の承認を求める声で盛大な拍手で承認されました。

次に十文字新支部長の挨拶では「只今ご紹介賜りました十文字でございます。只今は推薦委員会の石澤委員長からのご推薦と、ご出席の支部組合員の皆様からのご承認により新しく支部長となりました。何分力不足でございますし、



責任の重さを感じますが、幸いにも各地区にお願した役員の方のご推薦には、大変ご苦労をおかけしてすばらしい方々をご推薦いただき、今委員長よりご紹介ありました新執行部をスタートさせることが出来ました。これからは新執行部の協力のもとに正直に誠実に務めて行きたい」と述べられました。更に、印刷業界は今全く新しい時代に入っており、日本経済も少しずつ良くなっているもののバブルの反省でリストラの手を緩めていない、又一方ではマルチメディア社会への移行により、紙に情報を載せるといふ印刷業界の聖域が侵されつつあり、印



刷業界への需要の減少につながっていることから、この電子メディアを取り入れて行かないといずれ企業間に優勝劣敗の格差がつき、難しい事態に立ち至ることが懸念されるので、今後は質的变化・向上を目指して行く必要がある、といわれました。最後に「京橋支部は血筋の確かな由緒正しい支部であり、この支部を支部組合員の皆さんと一諸に盛り立てて行き度いと思えますので、何卒新執行部に対するお力添えとご協力をお願いします」と、支部長就任の挨拶がありました。

このあと、新執行部役員会員が壇上に立ち、十文字新支部長が紹介を行い、大きな拍手を受けました。

来賓挨拶として東印工組田島副理事長が、荒川前支部長から十文字新支部長へのバトンタッチと、事業報告並びに新年度の事業計画案が滞りなく済んだことへの祝詞、さらに荒川前支部長と前執行部には組合事業へのご支援をいただいたことへのお礼、十文字新支部長並びに新執行部へは今後の支部運営への期待と本部施策への支援をお願いします、との挨拶をされました。次に矢田中央区長が区政への協力に感謝しますとお礼を述べた後、中央区工業団体連合会の平林会長が祝詞を述べられました。

続いて中央区商工課の斎藤裕文課長が司会の山崎副支部長より紹介され、最後は木島監査の閉会のことばで閉会となりました。

続いて隣室で懇親パーティが行われました。進行は中島副支部長が務め、先づ荒川前支部長

が挨拶を行った後、本日ご出席の関連業界の方々に十文字新支部長を紹介し、十文字新支部長からは新執行部を紹介して幕をあげました。関連業界を代表して東製工組京橋支部長の岸田俊辰氏が挨拶を述べられた後、本部常務理事として活躍され誰からも惜しまれて今度常務理事を退任された小山英美顧問による乾杯のご発声で、一同これに和して祝杯をあげました。



しばし歓談に花を咲かせた後、通常総会ではあまり例のなかった関連業界の方々も多数出席されました。これは十文字新執行部を是非とも関連業界の方々に紹介したい、という荒川前支部長の強い意向から実現したもので、1社毎に壇上にて自己紹介をしていただきました。和やかな懇談が進み、続いて京青会の新役員となった小宮山会長、森山副会長、永井副会長、田島会計幹事、金山幹事の紹介があり、8時過ぎに神林相談役の中締の挨拶でお開きとなりました。



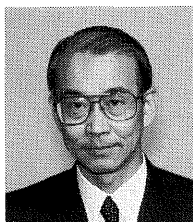
# 平成8・9年度京橋支部新役員

副支部長

榎本 則義

(株)榎本印刷所

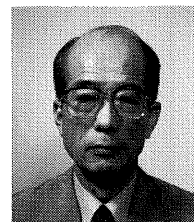
(総務)



支部長

十文字 康雄

三雄舎印刷(株)



副支部長

山崎 隆三

(有)山崎屋東商印刷

(会計)



副支部長

福田 満洲雄

福田印刷工業(株)東京支店

(総務)



副支部長

永井 直裕

永井印刷工業(株)

(総務)

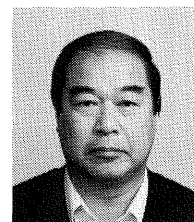


副支部長

青柳 晴男

(有)青柳印刷所

(総務)



監査

宇津木 俊雄

(株)七映



監査

山内 治夫

(株)光雄社印刷所



## 顧問・相談役・参与の会

6月26日(水)17時30分から、銀座東急ホテルにて新執行部による顧問・相談役・参与の会が多数の方々のご参加のもとに開かれました。

定刻、榎本副支部長が司会・進行役となり、開会のあいさつを行い、続いて十文字支部長が新執行部の紹介と、支部運営について現在企画中の研修会の内容概略説明、8年度主要行事予定の説明を行い、お集まりいただいた諸先輩から今後の支部運営にご支援をお願いする支部長あいさつがありました。

続いて新役員が自己紹介を行い、福田副支部長からは、第1回研修会(プリプレスのフルデジタル化)を企画した経過についての説明がありました。

懇親会は石澤顧問の乾杯で始まりましたが、その乾杯のご発声の中で「最近当支部関係で明るい話題が2つあり、1つは日本経済新聞連載の「私の履歴書」で村山前首相が若いとき、築地の一九堂印刷所に勤務されていた時期の事が書かれていたことと、もう1つはミスノプリテックの水野社長が天皇陛下に御接見された事」が紹介されました。

懇親会は印刷業界の現在諸問題から当支部事情の諸々に亘ってご意見が百出し、真剣ながら和気に溢れたものとなりました。

20時半過ぎ次回を約し篠倉常務理事の中締め

でお開きとなりました。



## 中央区工団連総会開催

6月6日(水)16時より、中央区工団連定期総会が、加盟10団体の常任理事、理事出席の中で開催されました。まず丸山常任理事の司会により

開会され、小葉副会長の開会挨拶のあと、平林工団連会長が会長挨拶を行い、「10月開催の区産業文化展の成功を期すこと、事務局の充実、会員増強に注力すること」等抱負をのべられました。引き続き平林会長が議長となり議事に移り、平成7年度事業報告が原田副会長より説明がありました。続いて同収支報告が斎藤会計により、会計監査報告は桜井幹事より報告されて、拍手により承認されました。役員改選では平林会長が新年度会長に推されて拍手で承認され、平成8年度事業計画(案)が原田副会長、同収支予算(案)が斎藤会計により読み上げられて、それぞれ拍手で承認されました。議事は終了し、来賓祝辞へ移り、まず矢田中央区長が祝辞を述べられ、続いて常山中央区議会議長、中村中央区商店街連合会副会長が来賓紹介を受け、荒川副会長が閉会の辞を述べられ総会は終了となりました。5時からは別室で、懇親会が開かれて新役員の懇親を深めました。



### 京青会総会開催

4月24日(水)、築地スエヒロ別館にて、平成8年度京橋支部印刷人青年会総会が開催されました。開会挨拶のあと、議長を小山会長が務めて平成7年度事業報告、同収支決算報告があり、拍手で承認されました。この後平成8年度会長及び幹事が選任され、新会長には、小宮山印刷(株)社長、小宮山貴史氏が選任されて挨拶を行い、続いて平成8年度事業計画案、同収支予算案が承認されました。議事終了後には新入会員の紹介、退会会員に記念品の贈呈がありました。

最後に来賓出席の荒川支部長が挨拶を行い、支部事業への協力を感じ、今後の京青会の活躍を期待しますと述べました。総会終了後は、懇親会が開かれ盛り上がりを見せておりました。



### 京橋支部印刷人青年会 会長就任にあたり



小宮山印刷(株)  
小宮山貴史

本年4月に開催されました通常総会におきまして、前会長の小山氏より会長という大役を引き受けることになりました小宮山でございます。

京橋支部印刷人青年会(以後、京青会)も昭和54年の創立以来17年を経過し、その間、多くの先輩たちに支えられ今日に至ったものと認識しております。

最近つくづく思う事は、この17年という歴史の中、京青会もいろいろと変遷を重ねてきたかと思いますが、その精神は青年印刷人とし社会に貢献出来るよう「勉強」することではないかと感じる事です。本を読むのも「勉強」、また酒を飲み語り合うのも「勉強」、同じ業界で働く仲間として、それぞれの企業での異なる事情も立場も飛び越え、来る2000年に向け、将来の企業経営者としその絆を深めていきたいと思えます。

今後京青会の活動に對しまして、支部の方々のご理解、ご支援を頂きたくお願い申し上げます。

### 東印工組通常総代会開催

5月23日(木)、東印工組平成8年度通常総代会が港区芝公園の東京プリンスホテルにて開催されました。野村理事長挨拶では「依然として不況の残る経営環境の中で、受注の適性利潤を確保する方策研究、電子化教育の推進等を展開していきたい。」又、「情報の発信地」として本部から発信している「NEWかわら版」は組合員の情報源として定着しており、「情報BOX」へのアクセスは年間2、800件と増大している等、本部の「守り」から「攻め」への姿勢を着実に展開していることをアピールしました。

また、議事は相原幹彦(山の手支部)、佐藤忠重(杉並支部)の両氏を正・副議長として進行し、平成7年度事業報告、決算報告並びに剰余金処分案が承認されました。

次いで、平成8年度事業計画、同収支予算、賦課金徴収方法も原案通り可決されました。新事業計画では、用紙の需給安定化と価格転嫁対策と安値受注の排除と週40時間労働制への対応など山積みする諸問題に取り組んで行くとしております。

議事終了後、退任支部長、平成7年度組合加入功労者に感謝状が贈られ、閉会となり懇談会へと移りました。



## 京橋支部研修会

## DTPの現状とデジタル対応

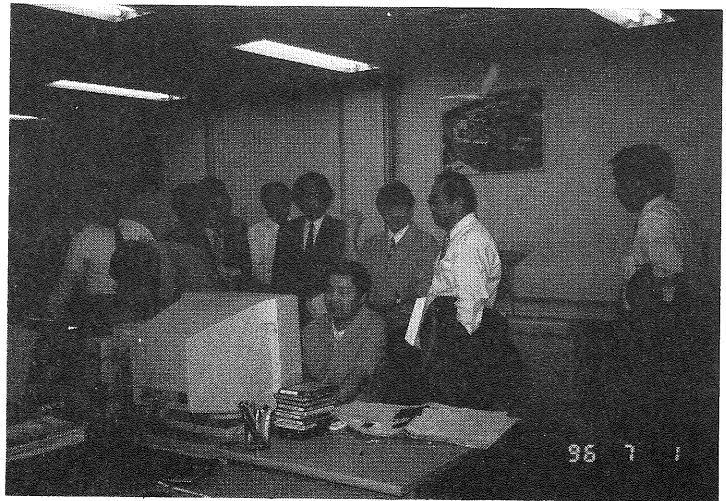
## デジタルセンター見学と講演会

梅雨の合間の珍しくカラリと晴れた七月一日(月)、十文字執行部が発足して最初の研修会が開催されました。近年の印刷界が直面する急速なデジタル化の実態を探ろうとの企画で、最新のデジタル現場の見学、及び既に経営レベルまで立ち上げた生の経験話を拝聴して、今後の指針にしようという研修会です。幸いこの地区の築地で去る五月にオープンしたばかりの(株)光陽社のデジタルセンターと、(株)帆風のメディアステーションの見学が快く承諾され、見学後、光陽社の虫本社長と、現場の陣頭指揮者千葉達也次長の実体験の話を伺う機会に恵まれました。

早速、支部組合員に案内をしたところ、見学希望者は(場所的キャパシティでの)当初目論見を五割も上回る五十八名に達し、見学後の銀座東急ホテルでの講演会は約七十名に及ぶ盛会となりました。

梅雨とはいえ晴ればもう夏、強い陽射しの午後三時十分には支部前に集合し、その足で築地のセンター訪問、二組に分かれて一時間に亘って二箇所を交互に見学しました。

程度の差こそあれ、まだまだアナログ作業に多くをゆだねている目から見ると、プリプレスの変化は一目瞭然、この先どこまでゆき、その



結果印刷界の業態がどのような変化をするのか、その一端を垣間見たような次第です。見学後は場所を銀座東急ホテルに移し、午後五時より二時間に亘り「DTPの現状とデジタル対応」及び「プリプレスの現場は今」の演題で、研修会第二部の講演会に入りました。以下、その講演会の詳細を掲載いたします。

## 司会・福田副支部長

お待たせいたしました。それでは只今より見学会に引き続き、第二部の講演会に入らせてい

たきます。大勢お集まりいただきまして真に有難うございます。大多数の皆様は第一部の見学会からご参加いただきましたが、ある意味ではカルチャーショックを受けられた方も、中にはいらつしやるのではないかと思います。デジタルプリプレスの現状、そのデジタルプリプレスの持つております高機能それから高い付加価値、それらを含めての豊かな将来への展望といったものを、まさに「百聞は一見に如かず」ということで再確認できた良い機会であったと思います。

皆様方の将来の中・長期の経営計画を立てる折に、三年先、五年先、十年先の我社はどうあるべきかということを検討される時、ぜひご参考にして頂ければと思います。

またご多忙の中を大勢押しかけて、業務を止めてまで見学の機会を与えてくださいました光陽社様、帆風様には心から御礼を申し上げる次第でございます。

これから第二部の講演会に入らせていただきますが、まずは十文字支部長よりご挨拶を申し上げます。

## 十文字支部長

十文字でございます。今日は当京橋支部主催で、株式会社光陽社さんと株式会社帆風さんにほぼ三十名位ずつ交代で見学させて頂きました。大変目からウロコが落ちるような素晴らしい体験をしたと思っております。まず冒頭にこのような機会を与えてくださいました株式会社光陽社の虫本社長に心から御礼を申し上げます。本



当に有難うございました。

さて、私も中小印刷業界は非常にいま社会全体が厳しい環境におかれており、また世界標準のパソコンがあつというまに普及しまして、特に印刷の前工程のプリプレスのデジタル化が日進月歩で進んでおります。そういう意味で各社それぞれ苦労をなさっており、内製化を進めていらつしやる所も有るでしょうし、一方、人材、財力、スペースなどいろいろの問題で仲々その壁を打ち破れないという企業もあるかと思えます。これをほっておきますと企業間の格差というものが、これから数年を経ずして非常についてくるのではないか、という懸念を持っております。そういった機会に、築地に進出されてきました光陽社さんと帆風さんの二社の見学会は、真に時機になつた見学会であつたと思っておりますが、これからの講演会も大変参考になる良いお話が聴けると思えます。今後のわれわれ中小印刷界の指針になるような講演会でありますようお願いながら、私のご挨拶いたします。(拍手)

#### 司会者

株式会社光陽社につきましては皆様ご存じのことので改めて説明するまでもないと思えますが、簡単に概略をご説明いたしますと、製版業界で日本を代表する企業の一つであり、また業界で唯一上場されている企業でございます。そのカラー製版にかけての技術力、クリエイティブの力というものについては、まさに群を抜いていると評価されております。九十年代に入り

ましてからは、デジタルプリプレスの新しい分野を開拓するために資本、人材を非常に集中的に投入されております。さらに先年は帆風さんと技術協力を結び、文字の世界にもその技術の翼を広げられ、文字通り現代では日本のデジタルプリプレスをリードする企業の一つでございます。

それでは虫本社長よろしくお願いいたします。

#### 講演会 PART ①

### DTPの現状とデジタル対応

株式会社光陽社 社長 虫本侃氏



ただいまご紹介いただきました虫本です。文字支部長さんと福田副支部長さんのご紹介があまりにも立派すぎ、いささか緊張しております。

きょうお話しする機会をいただき、どんな話をすればよいかと考え、印刷白書を見たり、自

分が貯め込んできたスクラップを見たりしておつた訳ですが、やはり自分の経営で苦労している話をした方が、皆様方には参考になるのではなからうかと考えました。そこで私も光陽社と帆風のここ三、四年の生きざま、動向、それから未来にかける抱負というふうなところを中心にお話申し上げたいと思えます。

私が創業者の片山から会社をお預かりした直後、どちらの責任でもないのですが、その時から四年続けて赤字でございます。つまり、いわゆるバブルが弾け、それからご案内にもありましたように国際標準のパソコンすなわちM A Cがわれわれ業界に入ってきたことで、われわれ業界は技術革新の真つ只中にあります。ですから、売上は減る、価格破壊は始まる、そういったところにまた、トリプルパンチじゃないですが、技術革新にも対応してゆかねばならないということでもあります。

私がいまにも先見性があつたように見られがちですけれども、実はいま申したような経済環境のなかで私が引き受けて一番思つたのは、いわゆるソロバンが合わないということなんです。人員も百七十人は多いということで、退職金を払って見せかけの分社等いろいろやりましても結果的にはまだ五十人多い。しかしあまりにも条件を絞ることはかりを考えてもいけない。新しい分野で、社員の雇用の不安をとりにくく道で、やはり本業または本業の業際のところだなにかないものかと、皆と相談しながら考え考えやってきた時に、デジタルと出会えたとい

うことです。デジタルと出会えて良かったなあと、私はこんなに感謝しているところです。

帆風の犬飼さんと出会いましたのはもう十数年前でして、こういう時代が来たから二人で、現金な話で文字の強いところと画像の強いところが一緒になってうまくやるやという話じゃございません。彼が十六年前に独立してから、社員を非常に大事にし、富士フィルムさんや凸版さんから講師を呼んで勉強し、熱心に社員教育に賭ける彼のさまが好きでして、帆風の勉強会には私は十六年前から参加しておりました。そういった意味で、経営観といえますかかわゆる事業を興してゆくことで、互いに惹かれ合ったということです。本日お集まりの皆様が、これからのデジタルの世界を判断してゆくに際し、情報を読み取り、判断し、決断してゆくには良いお友達良い相談相手を持たれるのが非常に大事かなと思います。いろいろな機材メーカーでも自分のところのシステムを喧伝しますが、本質の情報を制するには、やはり友達とか信頼できる仲間が必要かと思えます。

これから△DTPの現状とデジタル対応▽についてお話しする訳ですが、帆風のデータ分析を基に△マッキントッシュ出力センターの動向▽、光陽社のデータ分析を基に△製版工程のDTP動向▽と、この両社が進めつつあるリニューアル及び今後の展望をお話し上げます。マッキントッシュ出力センターの動向

出力センターの動向は表1からも明らかのように、九四年で生産量で見ますと印刷紙出力が

九〇%でフィルム出力は一〇%、売上では七対三。それが九五年になるとその比率が七五対二五、売上で五〇対五〇となり、今年には四分六の生産量で売上ではフィルムが七〇%に逆転しました。フィルム出力をカラーとモノクロの内訳で見ますと、九六年でもカラー物はまだ三〇%の比率です。

よく皆さんから四色物の対応が遅れているといわれますが、極端にいえば四色はいま始まったというような段階で、決して遅くもないし、勉強なさってゆかれれば追いつける段階ではないかと思えます。

帆風では九二年頃から出力センターを設置し、一・二色の文字中心のモノクロ出力でスタートしましたが、九四年以降出力枚数は倍々で急増

DPTの現状とデジタル対応

1. Macintosh サービスビューロー (出力センター) の動向

	出力枚数		売上高		フィルム出力内訳	
	印刷紙	フィルム	印刷紙	フィルム	カラー4色	モノクロ1-2色
'94年	90%	10%	70%	30%	10%	90%
'95年	75%	25%	50%	50%	20%	80%
'96年	60%	40%	30%	70%	30%	70%

2. 製版工程のDTP動向

	光陽社 P-DTP比率			全国平均		
	1~4月	5~8月	9~12月	完全DTP	一部DTP	従来工程
'94年			6%		10%	90%
'95年	8%	10%	14%	10%	20~30%	60~70%
'96年	18%	21%		10~15%	30~40%	45~60%

今年六月現在三〇台のイメージセッターで対応していますが、ここへきて四色物のフィルム出力がスピードを上げている状況です。

もう一つの特徴は、デジタルによる従来作業の進め方の変化によって、カラーカンパが急増していることです。いままでは校正はいつ出るんだ、というのがわれわれ業者と皆様方との接点でしたが、いまの時代はいかに早く、いかに最終のお客さんのご了解を得ながら仕事を進めてゆかか、というのがデジタルの根本です。表現を簡単にすれば、双方向ということ、お客様ともどもに物をつくってゆく時代が来たといえ、カラーカンパ急増に反映しています。帆風の築地も五月に四台のイメージセッターでスタートしましたが、パンク状態で急ぎよ二台追加し、カラーカンパもAカラーとレインボーを一台ずつ追加したということで、カラー物のスピード加速の度合いを読み取っていただけていると思います。

こうした背景の中で、これから一番大事なことは、デジタルデータと印刷の最終製品とのマッチング、つまり品質保証です。デジタルの入力場面でも、われわれ印刷または製版で長年培ってきたいろいろな組版ソフトとか運用ソフトを、微妙な面で導入してゆく機会が多い。同様で、MACで色は付けれども、機械がやってくれる範囲ではダメで、いわゆるプロの商品として通じるかどうかというところでは、もう一度カラーマネージメント、カラーセパレーションの原点は一応勉強し、色を管理する必要



があると思います。近年、フィルム of 技術屋の話では、この秋口にはデジタルデータを網点に置き換えたDDCP（ダイレクト・デジタル・カラー・ブルーフィング）対応のカラー出力機が早や出てくるということですので、カラー加速の環境はさらに促進されるでしょう。

参考までに私どもも、今年の予算を倍から三倍に修正させました。

それからカラーディスプレイ（五台設置）についても、紙以外の幅広い媒体へのカラー再生に必要とされ堅調です。カラーフィルムレコーダー（七台設置）は、会議や学会等の会合で、

プロジェクトで映像を見せながら説明してゆくビジュアル・コミュニケーションの機会が増えており、デジタルデータをカラーフィルムに作り直す仕事も、出力センターの中では需要が多いということです。

こうしたいろいろな対応の中で、帆風も光陽社も注目しているのは、短時間・小ロットのオンデマンド印刷の需要です。アイガスでも一部出ていましたが、従来のハード印刷機械メーカーでもデジタル・ソウ・プリントの分野の準備を進めており、来春には各社から一斉に出てくるようでありま。

帆風の平成八年一月決算は、売上五〇・二%増で塁損一億五千五百円を一発で消し、今期も引き続き予算は上方修正の軌道を辿っております。その背景は、今年一月末の得意先三千五百社が七月一日現在で五千社に増えているということ、一社MAC二台としてもその裾野の広さ、生産パワーはすごい訳です。従って、いまデザインから文字の入力、編集の流れは、誰がイニシアティブを握っているのか、皆様方もぜひ勉強なさる必要があるんじゃないだろうかと思ひます。

ですけれども常々私も考え、帆風でも考えておりますのは、こう言ったゆき方ができるのは、今後ここ二、三年であろうということです。やはりカラーマッチングとか、質への転換、あるいはもう少し他メディアとの融合というようなところへ進んでゆかざるを得ぬだろうという見方をしています。

#### 光陽社と製版工程のDTP

次に光陽社はいまどうなのか、ということでお話申し上げたいと思ひます。

赤字続きで社員を辞めさすばかりの経営じゃなしに、攻めのリストラをやらねばということ、誰かプランを言っても、役員からも下からもプランニングができません。私がデジタルしか生きられないなど、デジタルへの熱い思いを皆に訴えて、社員からは気が狂っていると云われながらも、DTPに特化し、まっしぐらに今日までやって来ました。

それではどうして光陽社がデジタルでゆこう、と私が判断したかというあたりを若干説明いたします。

皆さんよくご存じのように、毎年二月に軽印刷関連のMACワールドがあります。軽印刷に近いようなところで、MACなんてまだ玩具だと言っていた時代から、われわれ業界の人はそれはそれなりの道具として関心を払って来ました。九一年のMACワールドに私どもの韓国光陽社の社長が寄り、帰りに私どもの技術屋にいまアメリカとフロップピーでこうやっている、その校正を見せつけられた訳です。それを見たとき私は、これはえらいことだ、もう製版会社は画像の焼込屋になってしまふな、と危機観を覚え、急ぎよ技術部長と技術担当の役員と三人で韓国へ飛びました。それが先進国アメリカのデジタルであったといまに思ひます。

九二年あたりから私は、これからは画像だけではバランスが悪く絶対に生きてゆけない、光

陽社は文字の専門家を入れ、文字を制せなかつたら残れないと、自分で専門家に直接会って口説きに口説き、技術者をスカウトしてゆきました。こうしてフロッピーディスク等の媒体を利用して、MACやDTPの勉強が始まり、当時モノクロの定期雑誌に一部始まったFD入稿に対する技術対応を開始した訳です。

その後九三年には帆船と業務提携を結ぶ一方、カラー物定期雑誌に関し、従来工程の画像処理とのミックスにて、徐々に実験的に画像を含むDTP処理に進みました。九四年に入ってから、旅行カタログや通販カタログのDTP化等で十月頃から本格的に立ち上がり、カラー画像前提に高級商業印刷物にも積極的に拡大してゆきました。

私ども東京のデータでは、九四年下期のDTPの売上一億二千二百万円が、九五年下期には二億八千万円、パーセントで二三〇%くらいになっております。それに対して、従来の製版はここ二、三年間毎年一〇%ずつ落ち込んできております。ですからどうしてもデジタルでプロにならないければ、生き残れないという状況であります。

そんなことで今日まで、順調にデジタルは立ち上がって来ております。私どもが築地で皆様方にお役に立てるものは、何百時間、何千時間の汗と涙の運用ソフトが若干あるかと思えます。皆様方にはそれぞれ個々の環境、つまりお客様との関連や、設備状況等いろいろあるかと思えます。それぞれの状況に対して、例えば分解

だけとか、デザイン、文字組みだけとか、トータルでといった皆様方の状況に対応して、私どもとしてお手伝いさせていただけたらと思っております。私どもはキーワードとして、パーフェクトDTPとカインドを掲げております。カインドとは、文字通り優しいお手伝いということで、皆様方各社のお客様との何代にわたるマーケティングとか、営業コネクションのお役に立

### 講演会PART②

## プリプレスの現場は今

株式会社光陽社 デジタル部次長  
千葉達也氏



ただいまご紹介にあずかりましたデジタル部を担当しております千葉と申します。

「プリプレスのデジタル現場は今」との題名で何をお話ししたら良いかと考えておりました。が、実際に立ち上げてからいろいろと経験してきたことをありのまま皆さまにお伝えする、そ

つ、いわゆる大手と組むのではなく、いままで育ててもらったような状況の中でデジタルでも、皆様ともういちど新しい関係が持てたらと思っております。

次に当社の東京の現場を立ち上げてくれた千葉の苦勞話等も、参考に聞いていただけたらということ、私の話はここで終わらせていただきます。有難うございました。(拍手)

れが一番じゃないかと思えます。

### ① デジタル部門の立ち上げとスタッフ

ちょうど二年前、丸二年たったわけですけれども、KDC本部東京デジタルスタジオという名前でデジタル部門を立ち上げました。KDCというのは光陽社デジタルコミュニケーションの略で、デジタル処理によりお客さまとコミュニケーションをとっていききたいという願いが込められております。

立ち上げ当初のMACを取り巻く環境と申しますと、POWERPCといえます新しいCDを積んだPOWERMACがちょうど発売された年になります。また、イメージセッターもやっとカラーの出力に耐えうるイメージセッターが出て間もないところで、まだまだフルカラー四色のDTPを行うにはヨチヨチ歩きの状態だったと記憶をしております。

いまでこそMACもパブリッシング仕様という形で、それぞれの代理店がある程度メンテナンスまでフォローする強力なMACが登場したり、イメージセッターも国産メーカーで世界最

高速の機種が発売されたりという環境になっております。本当に二年間の間、こういった技術の進歩は驚くべきものがあるわけですが、技術の進歩でこちらが逆に、いつ、どういった機械を入れるんだと混乱させられてしまう一面もあるわけです。

当社は「パーフェクトDTP」という言葉を合言葉としてデジタル部門を立ち上げてきましたが、これはあくまでも現状の製版レベルを維持する、そういったものを大前提としたDTPを目標としております。また、機械の構成も、CEPSの機械とは一切リンクをさせない、そういった考え方をとっております。

それでは、まず最初に立ち上げからの人員面、人選面、そういったことに関してお話ししたいと思います。

まず立ち上げ当初、プロジェクトメンバーということで、社内の各部署より五名の人員を抜粋しました。ご存じのように私も画像に関しましてはそれなりの歴史、経験を積んでおりますので、あまり心配はしてなかったわけですが、DTPによる文字と画像の統合処理ということによる文字組版、文字処理といったものには若干の不安がございました。そんな部分を補っていただくという意味で、関連会社の帆風から二名の応援を願い、合計七名という形のプロジェクトを結成いたしました。

プロジェクトメンバーそれぞれの出身部署といたしますと、まずスキヤナ部門より一名。これは入社二十五年程度のスキヤナの超ベテランの

部類に入る人間です。それから修正部門からレタッチを経験している者一名。入社十年ほどの者で、主にDTPに関するイメージセッターによる出力を中心に仕事をしてまいりました。また、後工程であります修正部門のまとめ作業などの橋渡的な役割も果たしております。それからCEPSによる画像処理、図形処理などの経験者二名。この中には私も入っております。それから前工程になります。カラー準備関係を経験している女子一名と、社内から計五名、そういった人選をやりました。

メンバーそれぞれの役割は大変重要で、まずスキヤナ担当者はいままで培いました画像を見る目、判断力といったものを中心に。それからもと修正担当者の役割というのは検版力で、やはり写真部門よりも厳しい目で検版をする。下版の文字一つ抜けても事故になるというものを未然に防ぐ力、そのへんはやはり修正部門が一番じゃないかと思っております。それからCEPS担当者は、いろいろと日頃コンピュータに馴れているといった意味でコンピュータの操作とか、それに伴う機器の運用を中心に、DTPとしてどのように置き換えていくかといったものを主眼としてやってきております。その後入選のほうは、CTS部門のMACへの移行により相当文字関連も強くなり、文字に関するも独り立ちができるような状態になりました。あるいは他事業所からの配置転換、それから中途採用の登用、新入社員の補充という形で、今現在築地デジタルスタジオも合わせ三十名ほどの

部隊となっております。

MACによるDTPの発展により、一人のクリエーターがデザインから製版まで一貫して処理ができる。これで製版技術者は要りませんと、そういった言葉がよくDTPの世界で囁かれていたりするわけですが、最近はどういった記事も少なくなりまして。実際問題、MACというのはご存じのように単なるツールなんで、それを生かすも殺すも使い手しいといった要素が非常に多く含まれております。DTPを行うためには、製版、印刷の知識はもちろんのことながら、画像の処理技術、それから組版技術、デザイン感覚、そしてコンピュータに対する知識、それからそれぞれのアプリケーションを使う技術力と、そういった多種多様のたくさんの方が必要になってくるわけです。これを本当に一人の人間が完璧にこなせるといったスーパーマンは存在しないんじゃないかと思っております。コンピュータを動かせる人間だけでは何の役にも立たず、DTPイコールMACに詳しい人間ではないとはつきり言えると思います。なおさらMACオタクなんて呼ばれている人間は、これは非常に生産を阻害する要素が強い。

デジタル化をいかにうまく運用するかはいままでの製版あるいは印刷での幅広い知識、技術を有したベテラン社員、そういった人たちのしつかりとした判断力、これがいちばん必要になってくると思います。

とはいうものの、いままでの印刷製版だけの職人芸的な者ではこれからのDTP化、デジタ

ル化といったものはうまく運用できないのも逆にいえば確かな部分です。そういった職人芸というものはちよつとかなぐり捨てていただいて、まったく新しい観点に立つて作業効率を変えていくといったことを考えていく必要があると思います。

というのは、M A C の世界というのは本当に単なるパソコンなんです。M A C に対するいろいろな情報、たとえば機能のアップデートですとか互換性、それからソフトの情報、そういったものは指をくわえて待つてもいいころに入つてこない。いままで C E P S の機械ならメーカーのほうで手取り足取り、ある意味では要求しないものまでバージョンを上げていく。こと M A C に関してはそういった機能を向上させる情報というものはこちらで求めていかないかぎり何ら伝わってこない。そんな意味で、やはり M A C 関連の雑誌は一通り目を通すなり、たまには秋葉原あたりで情報を収集するという努力が必要じゃないかと思えます。これが M A C オタクに言わせると努力ではなくて趣味になつてしまふ。そのへんが非常に微妙なおもしろい世界になつているかなと思つております。

人の教育というのがいちばん頭が痛いことかと思えますが、ここでちよつと一つまとめてみました。まず一番目としまして、D T P、デジタルの世界ではやらなければいけない事柄の範囲が非常に広いけれども、すべてをこなせる完璧な人間というのはいない。で、それをこなすためには、まずそれぞれのセクションにシッ

りとした担当を決め、一人々々の役割を明確に決めて、いろいろな人の力を結集していかなければ、なかなかうまく運用ができない。それからもう一つは、デジタル化といえどもアナログの経験がなければダメで、アナログの経験を基にしたうえでデジタル化を押し進めていくことがうまくいける方法の一つじゃないかと思えます。それから何よりもいけばんだ切なことは、体力と気力とトラブルを解決させるための粘り強さと、そういったことになるかと思えます。

要するにデジタルというのはまだまだ過渡期で、とくに四色のデジタル化なんていうのはまだまだ駆け出したばかりの状態です。いろいろと M A C の講演会等では華やかな話がいつぱい出てくるわけですが、華やかに見えるものほど不完全なものが多く、そういったものを克服するために、いままでの概念を打ち払い、地道な努力が必要であると思えます。

## ② デジタル化のシステム構成

次に、当社のシステム構成についてお話ししてまいりたいと思えます。先ほどもお話ししましたように、「パーフェクト D T P」を合言葉に、あくまでも現状の製版レベルを維持したうえでのデジタル化への移行ということを大前提にしております。現状当社で抱えている仕事の大半がフルカラー四色もの、当然実データがたいへん多く含まれている商業印刷物がメインになっております。この実データというのがご存じのように非常に重いデータで A 6 サイズで約一〇

メガぐらい、A 4 サイズで約六〇メガ程度のデータ量となります。このような重いデータをどうやって M A C で処理するか。またはどういったネットワーク環境を構築していくか。そういったものが非常に問題として直面してまいりました。一般的にこういった M A C を使うデジタル化を進める場合のシステム構成といひますのは、インターネットなどのケーブルで実データをサーバーに転送して、そこで O P I 用の低解像度データを作つて編集処理を行う方法がとられているわけです。こういった方法も将来的にネットワーク環境といったものが強化されれば、十分使える方法だと思ふんですが、現状のテンベラスクラスのインターネットではとても無理で、先ほど申しました一つの仕事で何百メガというような重いデータを扱うには非常に無理があるというのが現実だと思ひます。

そういったデータを転送するために、インターネットを使えば M A C が二時間、三時間、まあそれ以上かもしれない、占有されてしまうわけです。そうしますと M A C の台数をいくら増やしても、その転送だけで待ち時間で終わつてしまふ。非常に生産効率面で使えないような状態になつてしまふ。M A C の世界では理論上出来るということと実際上使えるということでは大きな隔りがある。ましてや現状の製版レベル、すなわち C E P S における画像の品質、それから処理スピードなどを維持したうえでの D T P 化では一つのネックになつてくるわけです。このような問題を解決するために当社

では、二ギガの容量を持ったシャトルディスクを採用しております。

作業の流れとしては、まずスキヤナでデータをバッチ処理をして連続で入力し、この連続入力された実データは、シャトルディスクのほうに直接M A C用のデータとして転送されます。その転送されたシャトルディスクを抜き取り、それぞれ編集するM A Cへ一瞬のうちに転送する。こういうことによりM A Cを占有する時間というのが極端に短くすることが可能になりました。これをオンライン転送、あるいはスニーカーインターフェースなどという形で呼ばれております。

ネットワーク化、あるいはサーバーの利用などといいますが、先ほど進歩的で便利なものと感じてしましますが、先ほど述べたように出来るということと実際上使えるということとはたいへん大きな隔りがあります。とくに業務としてM A Cを使うといった場合には、非常にそのへんはネックな問題になってきます。

よくいろいろいまサーバーだ、ネットワークだと騒がれているんですけども、非常にサーバーというのが高額な機械なんです、この運用一つ間違えばデータのごみ箱になる可能性も秘めているわけです。

それから通信環境なんかでも、これはN T Tのほうの整理に依存する部分も非常に多いわけですが、現状普及しておりますネット64、その程度のI S D Nではまだまだ、文字情報ならともかく、画像データなど送れないというのが現

実だと思えます。よく私冗談で言うんですけども、たとえば新宿にあります事業所とこちらの築地のデジタルセンターをI S D N回線で結んで実データのやりとりを本当にしようとした場合、現状一メガバイト三分十秒。そういうのがI S D Nの世界なんですけれども、たとえば一〇〇メガのデータを送るとしますと、三分十秒という五時間の時間がかかってしまう。これを地下鉄で運べば、江戸川橋から新富町まで往復で三百六十円。三百六十円でM O一個を運べばそれで一・二ギガのデータが運べると、それでいまの現状ではネット64を引くならアルバイトを一人雇ったほうが安い、そんな状態かと思えます。

非常にネックな話ばかりしてしまっているんですけども、コンピュータの世界の技術革新、これはもう本当に日進月歩、目を見張るものがあります。いま言ったような通信環境、こういうものはけっして無視できる問題ではない。そしてこういった環境が整うのもそんな遠い未来の話ではなく、本当にすぐ近い未来にこういうことをちよつと付け加えておきたいと思えます。そのために社内での整備、それからそれぞれの研究、そういったものは常に進めていかなければいけないと感じております。

デジタル化における機器構成において大切なこととして、四つ挙げてみました。まず一つ目は、現状での製作工程、アナログ工程、C E P S工程、いろいろありますけれども、そういう

た工程間で起こる問題を的確にまず捉えておくこと。それから二つ目は、どこまでをデジタル化するのかというアナログとデジタルの明確な線引き。三つ目は、出来るということと実務上使えるということをはっきり区別させるということ。それから最後、四番目になります。機器構成としてはなるべく単純な形をとって、誰でもがすぐ理解できるように構成図にしておくということが大切なことじゃないかと思えます。

それから当社のシステム構成のもう一つの特徴としまして、先ほどちよつと述べましたM A CとC E P Sは一切リンクさせないということがございます。この理由にしましては、大きく分けて二つの理由がございます。

まず一つとして、M A Cと高価なC E P SをリンクさせることによりM A Cの不備を補う考え方ではなくて、やはりM A Cにおける機能を強化させる。それからいままでやってきたC E P Sの経験を生かして、M A Cを使ってどこまでパフォーマンスというものが構築できるのか。そういうものを目標にしております。いろいろとM A Cで出来ない不備な部分、これは正直言っていっぱいございます。たとえば文字の白縁取りが出来ないとか、抜き合わせが汚いとか、それからケヌキ合わせの問題とか、いろいろあることは確かです。しかし、だからといって一点二点の細かな問題を解決させるために非常に高価なC E P Sとリンクさせる必要があるのか多少疑問を感じております。

それからもう一つの理由。この理由がいちばん大きいわけですが、まずデジタル化によってM A Cという一つのツールを使ってお客さまとデータの共有化をしたい。お客さまとのパートナーシップを構築していきたい。先ほどデジタルコミュニケーションという言葉を通してあげましたが、M A Cというお客さまとの共通のツールを使用して、同じ土俵に乗ってコミュニケーションを図っていく。そこにはC E P Sなどという特殊な装置は混在させたくないというところがございます。いままでの製版工程でのブラックボックス的な要素を削除して、共通認識のうえ、流通経路の簡略化、あるいは意思疎通、そういったものを図ったうえで、低価格化、短納期化を実現していきたい。それがいちばん大きな理由になっています。

デジタル化についての考え方というのは大きく分けて二通り存在するわけですが、一つはデジタル化によってすべての作業を内製化するといった考え方。これはよく企業内における社内報あるいはパンフレットの作成といったものに代表されるかと思えます。それからもう一つの理由、方法というのはデジタル化によるデータの共有を図るといったものにあるかと思えます。まさにわれわれとしてこの後者のほうを選択しているということです。

### ③現状での問題点

次に現状で抱えています問題点というものを簡単にお話ししておきたいと思えます。

まず当社で行ってまずデジタル処理という仕

事の内容は、大きく五つ六つに分かれるかと思うんですけども、まずデザインから一貫して処理するもの。それからM Oに入っているレイアウトデータを使用し、それを実データと貼り替えて出力するもの。完全にお客さまのほうで作られたデータを出力するだけといったもの。それから実データ、あるいはトイレスデータなどの各種データのお渡しというもの。それから画像のクリエイトといったものがあるわけなんです。いちばん問題になってくるものはM Oでいただいたデータです。このM Oでいただいたデータの約八割は何らかの手直しが必要だというのが現実でございます。

何が間違っているかといったもので簡単な例としましては、われわれ製版・印刷の分野では当然と言われております断ち三ミリがないとかトンボがない、あるいはトンボが墨一色にしかない。そんなことから始まりまして、データがR G Bのまんまになっていたりとか、いままでの版下でのオーバーレイみたいなものも一つの版下として作ってきてしまうために文字が使えるようになってしまったり、何らかの手直しが必要な問題が未だに残っております。それからこれも大きな問題ですが、書体の問題で、こちらにある書体を連絡してみても、何度も違う書体をお使いになる。そういった形で書体の変更がいつも必要になってくる。

そういった問題は、そのデータのやりとりにあるわけで、従来のような版下カラーといったものがM Oの中に入っているので見えないため

に、どうしても入稿段階での甘さが出てくるというのが原因しているんじゃないかと思えます。こういった簡単なことを解消するためには、入稿段階でのチェックリスト、これはもう基本的なことかと思えます。出力センターなんかでデータの出力をお願いするときは、受付でそういったリストを書かないかぎり受け付けていただけません。

よくD T Pは早い、安いと言われますが、何が原因しているかといいますと、クリエーターがある一部分、ある特定の部分まで直接製造にかかわることにより副産物的に出来たものなんです。どういうわけかこの早い、安いというのが非常に前面に出てきてしまっている傾向がある。このへんはひとえにメーカーの宣伝とかあとは過度な情報に踊らされているといった面もたぶんあり、じゃ、どうしたら本当に早い、安いができるかといえば、やはりカラーカンプの有効的な利用が挙げられるのではないかと考えております。もう初校イコールカンプという考え方は今後一切なくさなければ、けっして実現できるものではありません。

### ④今後の課題と展望

それでは、最後になりますけれども、今後のデジタル分野の課題あるいは展望ということに關してお話ししてまいりたいと思えます。

現状におけるフルデジタル処理と呼ばれるものは全国平均で一五%から二〇%ほどと予想されており、「デジタルもどき」といった一部分的なデジタル処理というものも含めると大体



三〇%から四〇%というのが現状かと思えます。デジタルに関してはさまざまな問題点があるわけですが、そういった問題点がやつと問題点として捉えられた時期と、そういうふうには解釈しております。今後ますます拡大されてきますデジタル化の流れの中で、まず業界としては、各メーカーも抱き込んだ形で標準化あるいはルールづくりといったものを決めていく必要がある。いま決めなければ、またどんどん、どんどん泥沼に入っていくんじゃないかと、そんな気もしております。また、この日本の印刷物に対する要求度の高さ。その要求度が高いがゆえに、複雑な工程、それから無理、無駄といったものを重ねているわけですから、そういったものも業界全体が一つの方向を向いていかないかぎりなかなか改善できないのではないかと、そのような感じを受けております。

それから今後の展望といった形では、デジタルの一つのメリット、たいへん大きなメリットかと思いますが、デジタルデータの二次利用、三次利用というものを利用しまして、紙メディア以外のものへも対応する。そのことによりまして印刷業、製版業という殻を破りまして、デジタルを抜きにした情報処理産業と変身しているものではないかと思えます。

ISDNのネット1500、あるいはB-ISDNなんていう高速な通信環境、それからデジタルカメラ、オンデマンド印刷など、まだまだ技術的あるいは品質的に問題が多いことも確かです。しかしこういったものが近い将来必ず

主流になっていくというのも事実じゃないかなと思っております。そういった時代、大げさに言えばグーテンベルグの印刷技術発明以来の大改革と言われているこの印刷業界のデジタル化に関して、この時期にわれわれが携わったということを確認して、新しい形、新しい形態をつくり上げてゆく必要があるのではないかと、感じ

### △八丁堀地区だより▽

#### 遊ぶために遊ばず

区長 小倉 昭夫

八丁堀地区に「八親会」なる親睦団体があることは、京橋支部の皆様はすでにご存知のことですが、その歴史、変遷については、支部七十年誌に寄稿された榎本副支部長の「八親会」雑記に詳しく書かれています。会のモットー「よく働き、よく学び、よく遊ぶ」の中で、私の担当は、「よく遊び」なので、筆不精の私には大変重荷なのですが、地区長の立場上、已むを得ず筆をとり、今年度の行事を紹介しました。

毎月第三水曜日に例会を開き、平均すると二十社前後が出席します。本部、支部からの連絡事項が報告され、各事業への協力、意見を聞く訳ですが、「遊ぶ」だけでは、という事で、旅行会が毎年四月に、それと「学ぶ」を兼ねた、「経営技術研究会」が六月頃に、ゴルフの会が年に十回ほど開催されています。

四月の親睦を主にした旅行会ですが、一泊の

ておる次第でございます。

今後ともデジタルという共通なツールを使い、皆さまとのパートナーシップを持って、今後ともお付き合い願えたらということをお願いしまして、私からの話を終わらせていただきます。どうもありがとうございます。(拍手)

旅という事もあり、近郊の行楽地は全てという程踏破しているので近年は、仙台、新潟と足を伸ばしております。今年は四月十三、十四日に新潟・岩室温泉「ゆめや」を訪れました。途中、月夜野辺りでは突然の雪に逢い都会では見られない、美しい山々の雪景色を観ることができました。燕三条で関越道を下り、山芋をつなぎに使った名物、「へぎそば」に舌鼓をうち、酒蔵にも寄り、日本酒党の参加者の希いかなえながら、旅館に到着しました。最近の参加者は、大変ぜいたくになり、その土地の名物を老舗で喰い、一流の宿に泊るといふ希望を満たすのに、幹事でもある私は一番苦労する所です。「ゆめや」は、我々団体が満員になる程の個人客用の宿で、離れスタイル、庭に面した部屋で、旅慣れた長老方にも非常に喜ばれ幹事として安堵の胸を撫でおろしました。翌日は弥彦神社、良寛ゆかりの地、寺泊の魚市場などに寄り土産を宅急便で頼む程買い、渋滞にも逢わず定刻通り八丁堀に帰着しました。

次に六月一・二・三日に開催された「経営技術研究会」の研修旅行ですが、この方は、当地

区きつての凝り性、(失礼ないい方ですが)の迷?幹事が、練りに練った旅程のもと、「南紀・鳥羽」を訪れました。早朝から日航スーパーシートの特典でもあるラウンジにてビールを飲み、成田とは違った雰囲気(ハブポートと埋立地の建築に関心がある?)の関西空港に降り、近代的(超有料)な連絡橋を渡り広葉樹繁る南国紀州に足を踏み入れました。ガイドの説明の端々に吉宗公が出てくるのが少々気になりましたが、西田敏行の顔を思い浮かべながら紀三井寺を参詣(南紀白浜の奇岩(三段壁、千畳敷)を経て、少々長旅になりましたが勝浦温泉、ホテル浦島に到着。ホテルは岬の山頂にあり我々の宿泊した山上館はその内でも一段と高い場所で眼下に広がる勝浦港の夜景は素晴らしいものでした。宴会には少ない芸奴の中から選りすぐり?が来てくれ、カラオケも用意してあったが、三味線の伴奏は歌手に合わせてくれるので、各自思い思いの節まわしで自慢の喉を披露し、延長、延長の宴会でした。我々の年輩のものは、勝手にリズムを刻むカラオケより糸の方がよほど歌い易く感じられる。

いまだ酔い醒めやらぬ眼をこすりながら翌日は、那智の滝を眺め、那智大社の石段を登る頃には酒気もぬけ、鬼ヶ城の昼食では酒を注文する始末。

途中伊勢神宮は横目で通り過ぎ、一路二日目の宿泊地、賢島宝生館にたどりついた。連日一八〇キロ近いバスの移動で少々疲れ気味の面々だが、宴会では再び生気をとりもどし、若いホ



ステスと今日はカラオケで歌いまくりました。これは旅館側の手配ミスで芸者が来ず、急遽バーからホステスが派遣されたためで、これも旅の思い出となるハブニングでした。

第三日はリアス式海岸線に真珠養殖筏の浮ぶ海を眺めながら志摩スペイン村に立ち寄り異国の香りを少々感じて松阪に向い、城跡に登り、史跡を尋ね「和田金」でステーキを喰べることになった。東京のデパート名店街にも出店している程の老舗ではあるが、食べ方にまで注文をつける格式(?)にはいささか気分がそがれた。松阪から近鉄で名古屋へ新幹線にて東京へと帰った訳ですが、毎年同じメンバーでの旅であるため、さしたるトラブルもなく楽しい研修旅行を終了しました。

次にゴルフの会ですが、会を重ねて今回は、三九五回のコンペとなり、七月十八日取手国際にて十二名の参加で行なわれました。炎天下、ホール毎に水を補給しながらのプレーで苦勞しました。スタート前全員にこのスコアは支部報に掲載されますので頑張るようと言えたのですが、ここではあえて優勝者のみを記しておきます、グロス82、ネット70で三洋印刷、富原さんの圧勝でした。これだけ回を重ねていると、JGAハンデより正確な八丁堀ハンデが決められており、毎回優勝者の変る楽しいコンペとなっており、八月には少々涼を求めて、長野方面に一泊にて開催されます。以上同地域で同業者が共存共栄を計るこれが組合の原点だと思えます。この点でも私の担当の遊びだけな

く企業活動に於いても活発な交流を今後共は  
かっしていきたいと思っております。

## 支部の動き

4月4日(水)東印工組臨時総代会、(14時)於・  
品川プリンスホテル

4月24日(水)部長・監査会、(11時~14時)於・  
支部室、事業報告書作成について

4月24日(水)京青会定時総会、(18時30分)於・  
築地スエヒロ別館、荒川支部長出席、新会

長に小宮山貴史氏(小宮山印刷株)を選出  
5月16日(木)通常総会開催、(18時~19時)於・

銀座東急ホテル、司会 山崎副支部長  
。開会のことば 石井副支部長

。あいさつ 荒川 支部長  
。議長および副議長の選出

。議事  
第一号議案、平成7年度事業報告  
荒川 支部長

第二号議案、平成7年度収支決算報告  
関根副支部長

平成7年度監査報告  
木島・宇津木監査

第三号議案、平成8年度事業計画案  
十文字副支部長

第四号議案、平成8年度収支予算案  
関根副支部長

第五号議案、次期役員承認

推薦委員会 石澤委員長

。新支部長あいさつ

。議長および副議長の解任

。来賓あいさつ

東印工組副理事長 田島一弥殿

中央区長 矢田美英殿

中央区工団連会長 平林智司殿

。閉会のことば 木島監査

。懇親パーティ、(19時~20時)会費1万

円 進行 中島副支部長

挨拶 荒川 支部長

関連業界代表挨拶

東製工組京橋支部長 岸田俊辰殿

乾杯 京橋支部相談役 小山英美殿

一 敬 談

中 締 京橋支部相談役 神林克明殿

5月18日(土)京橋製本協同組合総会、(15時)於・熱海温泉ニューアオイ 十文字支部長

出席

5月23日(木)本部通常総代会、(14時)於・東

京プリンスホテル 十文字支部長他出席

5月28日(火)中央厚生事業協組総会、(17時)於・ロイヤルパークホテル 十文字支部長

出席

5月30日(木)部長・監査・地区長会、(12時~14

時)、於・支部室

1、顧問・相談役・参与の会の開催及び支部

役職の推薦について

2、平成8・9年度支部名簿発行について

3、平成8・9年度支部予算について

4、その他

6月6日(木)中央区工団連総会(16時)於・中

央会館 十文字支部長他出席

6月9日(日)10日(月)中央区工団連宿泊研修旅行

(8時30分~翌日17時30分)、於・茅野市・

蓼科温泉「蓼科グランドホテル滝の湯」、

講演・茅野市の文化、風土について

翌日カゴメ(株)カゴメ富士見工場見学

6月18日(火)部長・監査・地区長会、(18時)於・ユニコンクラブ、会費5千円

1、支部長会報告事項

。野村理事長挨拶、支部長自己紹介

。支部長会の運営について

。支部長の職務について(本部関係)

2、各種委員会報告事項

3、当面する支部事業について

。顧問・相談役・参与の会の開催について

。第1回京橋支部研修会の実施について

。支部名簿発行について

。支部報「京橋の印刷」の発行について

4、その他

。賦課金(8年1期)の回収状況及び地区

事業費の配分について

6月19日(水)八丁堀地区会、(18時~19時)於・

支部室

6月24日(月)産業文化展印刷・製本分科会、(12

時~14時)於・支部室

印刷Ⅱ京橋・日本橋、軽印刷中央支部、製

本Ⅱ京橋・日本橋、富士フィルム、プロセ

ス資材他出席

6月26日(水)顧問・相談役・参与の会、(17時30分～19時30分)、於・銀座東急ホテル

。新執行部就任のご挨拶

。支部役職依頼について

。今年度支部事業の概略ご説明

会費1万円

7月1日(月)新執行部第1回京橋支部研究会、

見学会、(15時30分～16時30分) (株)光陽社

デジタルセンター、(株)帆風メディア

アステーション

講演会、(17時～19時) 於・銀座東急ホテル・松風の間

。基調講演 (株)光陽社代表取締役社長 虫

本 侃氏

。プリプレスのデジタル現場は今

(株)光陽社 DTP 次長 千葉達也氏

7月4日(木)本部支部長会、(15時～) 於・印刷

会館4階、十文字支部長出席

7月11日(木)部長・監査・地区長会、(12時～)

於・支部室

支部員の異動

脱退組合員

。三葉印刷(株)、大澤静一氏(新川地区) 4

月

。(株)セイノグラフィックス、椎名敏男氏

(八丁堀地区) 6月

。布施印刷所、布施和夫氏(入船地区) 7月

お悔やみ申し上げます

▼湊地区、三和印刷社社長、市川仁作殿御逝去(4月)

▼八丁堀地区、(有)文星堂、会長御母堂井上歌子殿御逝去(4月)

▼湊地区、(株)進和堂社長、鈴木和雄殿御逝去(6月)

8 年度京橋支部主要行事予定

◇改正消費税研修会 8月23日(金)17時～19時 於・全印健保会館

◇支部長会(本部) 9月5日(木)

◇部長・監査・地区長会 9月12日(木)

◇P R I N T E K '96東京(本部) 9月12～(日)14日

◇『敬老の集い』(本部) 9月24日(火)

於・明治神宮

◇新年臨時総会々場下見会 9月28～29日

◇支部長会(本部) 10月3日(木)

◇部長・監査・地区長会 10月9日(木)

◇産業文化展開催 10月16～19日

◇支部長会(本部) 11月7日(木)

◇従業員表彰式(本部) 11月9日(土)

於・明治座

◇部長・監査・地区長会 11月14日(木)

◇理事会(本部) 11月19日(火)

◇支部幹事会 11月下旬

◇支部長会(本部) 12月5日(木)

◇顧問・相談役・参与の会 12月初旬

◇『新春の集い』 1月13日(月)

於・東京プリンスホテル

◇新年臨時総会執行部打合せ 1月中旬

◇新年臨時総会 1月31日～2月1日

於・箱根富士屋ホテル

◇支部長会(本部) 2月6日(木)

◇部長・監査・地区長会 2月13日(木)

◇支部長会(本部) 3月6日(木)

◇部長・監査・地区長会 3月13日(木)

◇理事会(本部) 3月21日(金)

編集後記

残暑お見舞申し上げます。

十文字執行部が発足し、早や3ヶ月になろうとしております。以来、顧問・相談役・参与の会、7月には技術研修会の開催と意欲的な支部活動に励んでおります。

今号は記事不足の心配もなく、発行することが出来ましたが、支部組合員と共に歩む「京橋の印刷」は永遠です。次号発行に支部組合員の一層のご協力をお願いいたします。(横田)